

「神は満たしてくださる」

イザヤ書
ピリピ人への手紙

第40章 6節～11節
第4章 10節～23節

説教 岡村 恒牧師

キリストの使徒パウロは、神がどのように私たちに関わり、私たちに何をして下さるのかを明確に語ります。「わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さいであろう。」(19節)神の豊かな愛と恵みが、あなたがたを満たして下さいのだ、と断言します。

実は、パウロはあらゆるものに満たされているどころか、何ひとつ持っていませんでした。牢獄に入れられて自由もなく、明日の命をも知れない身でした。これまでも、激しい迫害と困難を経験し、何度も死にかけました。イザヤ書40章に書かれている言葉の意味を誰よりもよく知っていました。「草は枯れ、花はしぼむ。／たしかに人は草だ。」(イザヤ書 40章7節)いつ、どこで命を失っても不思議ではないことを知っていました。同時に、このような私たちを主が牧者として導き、養い、その腕に抱いて下さることも知っていました。神が、滅びるはずの自分を選び取り、伝道という神の御用のために用い下さることを繰り返し味わってきたのです。

パウロは、ピリピ教会が生まれた時のことを思い起こしながらこの手紙を書いたことでしょう。(使徒行伝 16章11節～40節)アジアでの伝道を神に遮られ、福音が海を越えて渡った先がピリピでした。川辺で紫布の商人ルデヤが心を開きました。迫害によってパウロたちが捕らえられていた牢獄の獄吏(看守)一家が洗礼を受け、ピリピに教会が生まれました。この教会の人々は、何とかしてパウロの伝道旅行を支えようと心を砕きました。おそらく激しい迫害を受ける中で、「あなたがたは、よくわたしと患難を共にしてくれた。」(14節)のです。

パウロは、このような教会を指さし、「あなたがたの勘定をふやしていく果実」(17節)といった商業用語を使いながら、神が与えて下さる(いのち)の話をします。足る、富むとか貧しい、欠乏、飽き足りるといふのは、損得の話、経済用語です。商業都市ピリピの人々に分かり易いこのような言葉を使いながら、目に見える損得の話ではなく、神の恵みの中で味わう本当の命、希望について語ります。

パウロのために祈り、支えてきたピリピ教会の人々に向かって、神に赦され、愛され、新しくされた人生を生きることがどれほどの喜びにあふれたものか、この手紙は語ってきたのです。

そして同時に、今、ここに居る私たちに向かっても同じことを語ります。私たちのために地上にまで下り、その命を与え尽くして下さいたお方が、私たちすべての者の救い主です。このお方を信じる者は、確かな喜びを味わいながら生きることができます。本当の命を生き、希望を抱いて満ち足りて生きるのです。

「わたしは…ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。」(12節)という境地は、多くの人に到達したいと願うものです。貧しくても豊かでも、満腹していても飢えていても満足して生きたいと多くの人があります。しかしこれは、何か心の持ち様の話をしているのではありません。深刻な現実、欠乏と悲しみの中を歩む時にも変わることなく「わたしを強くして下さいるかたによって、何事でもすることができる」(13節)と言い切ることができる信仰の話です。神が、「キリストとその復活の力」(ピリピ人への手紙 3章10節)によって、「わたしを強くして下さいる」のです。すべてのものに満ちみちておられる神が私を強くして下さいるので、私は全てのものを持っていて、満ち足りていると宣言して生きることができるのです。

全知全能の神が私たちの神、万物を従わせる主イエスが私たちの救い主です。神は、満ちみちておられるお方です。(エペソ人への手紙 1章23節)神には何一つ欠けたものはありません。だから神を信じる者は全世界を手にしめます。神のものでないものなどないのです。私たちの体のどの部分も、私たちの人生のどの瞬間も、神と無関係な部分、瞬間などないのです。

神は「ご自身の栄光の富」(19節)から、私たちを満たしてあふれさせて下さいます。神は、永遠に変わることのない愛と真実をもって、私たちを生かして下さいます。そのために、主イエス・キリストをお与え下さいました。主イエスを信じる者が、確かな希望に満たされて生きようになるためです。地上ではなお欠乏の中であえぐとしても、やがて終わりの日、約束が完成する日、神の約束が〈成就〉します。もう何ひとつ残すことなく約束が満たされます。私たちはこの充満の時を目指して歩んで行くのです。信仰によって救われ、生きる者は、その終わりの日まで、一日一日、新しい喜びを注ぎ入れられ、満たされて歩むのです。

(記 岡村 恒)